

い、誰の記憶だ。

——わかったわ

——何が？

——あなたに必要なものが

——千里眼みたいですね

——だって、顔に書いてあるから、ね

——それ、医学をする人の観察、診察？

——どうかしら、あなたの眼が問題なのね

頭の右半分が微かに痺れている。思いだせない。何時だったのか。相手は誰だ。なぜ、こんな会話を交わしたような気がするのだろうか。

白く、柔らかい女の手がする滑って、消毒と治療が終ると、新しい繃帯がX氏の手の甲を隠していた。器用によく動く指の長い繊細な女の手、X氏は満足した。自信のある手に治療をしてもらえることが、もっとも患者を安心させることだから。

——薬は3日分。きちんと飲んで。様子が変だったら、もう一度来てみてね

手が変わ化した。白い繃帯をまいただけで、妙に、手が手以外のものに変わったと思ってしまう。波紋がひろがっている。X氏は、礼を言って、部屋を出た。

X氏は平凡な男だった。いや、もっと正確に言えば、簡単で、過不足のない生活のリズム、その平凡さが好きだった。1日が1日で終る。厳密に、確実に、1日を生きたぶんだけ死んでいく、それは1日以上でも以下でもない。さまざまな出来事が起伏の波となって、確実に自分を通過していく凡庸さ、それが1日だ。徹夜の仕事で追いまくられて疲労しきっても1日、昨日の反復そのもので時間が滑ってしまっても1日、頭の芯が澄み透明になってしまっても1日、歯が痛くて唸っていても1日、なにもなくても1日、すべてが1日であって、実際、カタのつくものは何もない。10年間も、同じ職場で働いていれば、多少の変化があっても、あらゆるものが平凡の代名詞になってしまう。そのことになんの不思議もない。

机にむかって、深く腰を掛け、一服、煙草でもと思い、左手の自由が利かないと意識する。ほんのわずかなことがリズムを狂わせるものだ。しかも、最初は、そのことをあまり深く考えることがない。X氏は、右手が利き腕だから、左手の怪我ではあまり不自由しないはずだ。右手が使えないより、便利ではないか、と。ところが、X氏にとって、左手は大切なのだ。X氏は、いつも、煙草を左手の指に挟む癖がある。残念だ。習慣を変えるのは辛い。いや、辛いというのではない。落着かなくて、妙に、心がゆれるのだ。X氏の左手は、ものを掴む、握る、押す、振る、それらの動作以外に、もっと別の機能をもっている。それはX氏の小さな工夫であり、日々の知恵のだが、それが禁じられる。それとは心を計ることである。X氏の左手は、心の水準器なのだ。